

ねずみといたちが栗をまいたこと 新潟県

むかし、ねずみといたちが、河原<sup>かわら</sup>でばったり出会いました。

「ねずどん、ねずどん。ここの草むらをたがやして、栗でもまこうじゃないか」  
いたちがいうと、ねずみは、

「そりやいいねえ」と賛成しました。にひきは、草むらをたがやして、栗の種をまきました。

やがて、いいぐあいに芽が伸びて来たので、いたちは、ねずみの家に行つて、

「ねずどん、ねずどん。栗の芽が伸びてきたので、畑の草取りに行かないか」とさそいました。ねずみは、

「いたちどん。おれは、風邪<sup>かぜ</sup>をひいたようだ。ひとりで行つてくれないか」といいました。いたちは、ひとりで畑に行つて、一生懸命草取りをしました。

何日かすると、いたちは、ねずみの家に行つて、

「ねずどん、ねずどん。畑にこやしをやりに行かないか」とさそいました。ねずみは、  
「いたちどん。今日は、あいにく用事があつて行かれない」といいました。いたちは、

また、ひとりで畑に行つて、草を取つたり、こやしをやつたりして、一生懸命働きました。

やがて、栗は大きくなつて、きつねのしっぽのような穂<sup>ほ</sup>が出ました。いたちは、毎日  
畑に行つて、穂が山吹色<sup>やまぶきいろ</sup>になつていくのをながめて、楽しんでいました。

いよいよ栗の穂が熟<sup>じゅく</sup>してきて、刈<sup>か</sup>り取りの時期になりました。

ある晩、ねずみが、こっそり畑に行つて、栗の穂を刈り取つてしまいました。そして、  
栗餅<sup>あわもち</sup>を作つて、子どもたちといっしょに食べました。

つぎの日、何も知らないいたちが、畑の見回りに行くと、栗の穂は、きれいに刈り取られていました。とほうに暮れていると、そこへ、とんびが飛んで来ました。いたちが、

「とんびさん。だれが栗の穂を刈り取ったか知らないか」ときくと、とんびは、

「おいら、そんなこと、知らないよ」といいました。からすにきいても、すずめにきいても、

「そんなこと、知らないよ」といいます。

いたちは、がっかりして、ねずみのうちに行きました。

「昨夜、だれかが栗の穂をすっかり刈り取って行ったんだ」と、いたちがいうと、ねずみは、なにくわぬ顔で、

「それはまあ、困ったことだなあ」といいました。そこへ、ねずみの子どもたちが出て来て、

「かあちゃん、かあちゃん。栗餅、もつとおくれ」とせがみました。ねずみはあわてて、「しっ。おまえたち、だまつとれ」としかりました。いたちは、

「さては、栗の穂を取ったのは、おまえだな」といって、かんかんに怒りました。そして、ねずみの歯を引っこ抜きました。それでも、ひとのいいいたちは、

「歯がなんにもなくて困るだろうから」といって、前歯二本だけは残してやりました。それから、ねずみの歯は、前の二本だけになったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『加無波良夜譚』文野白駒／玄久社